

特42

914

繪入
質録

伊賀越荒渡義談全



夢

金松堂梓



金松堂叢書

幾英惠

叙
 世に傳聞する諸家の騷擾或ハ復讐の奇談其說眞とて眞ならざる有
 り偽として偽ならざる有りと雖も總て江湖諸彦の耳聽せる處を以て
 眞と爲るが如し而して此編伊賀越の如きハ數馬の孝荒木の義勇該事
 々頗る大事に涉るを以て普く人口に膾炙し此書も又數種ありて事蹟
 委何れが眞り爲るも難し然るに余の藏書に據れば又五郎の父と半
 左衛門と云ふ初め安藤重信の臣なり事故あつて數馬に投じ數馬憐て
 食客とし竟に推舉して仕宦せしむ其後又五郎私憤を懷き數馬の弟源
 太夫を討父と計て幕臣安藤治右衛門に投じ百計を盡し父半左衛門と
 奪ひ而して後父子共に伊賀の上野に討る云々の説あり都て異なるも
 其是非を論せき今や贅言に似たりと雖も茲に一言を附して看客諸君
 の参考に供すと云爾

隱見亭霞船識

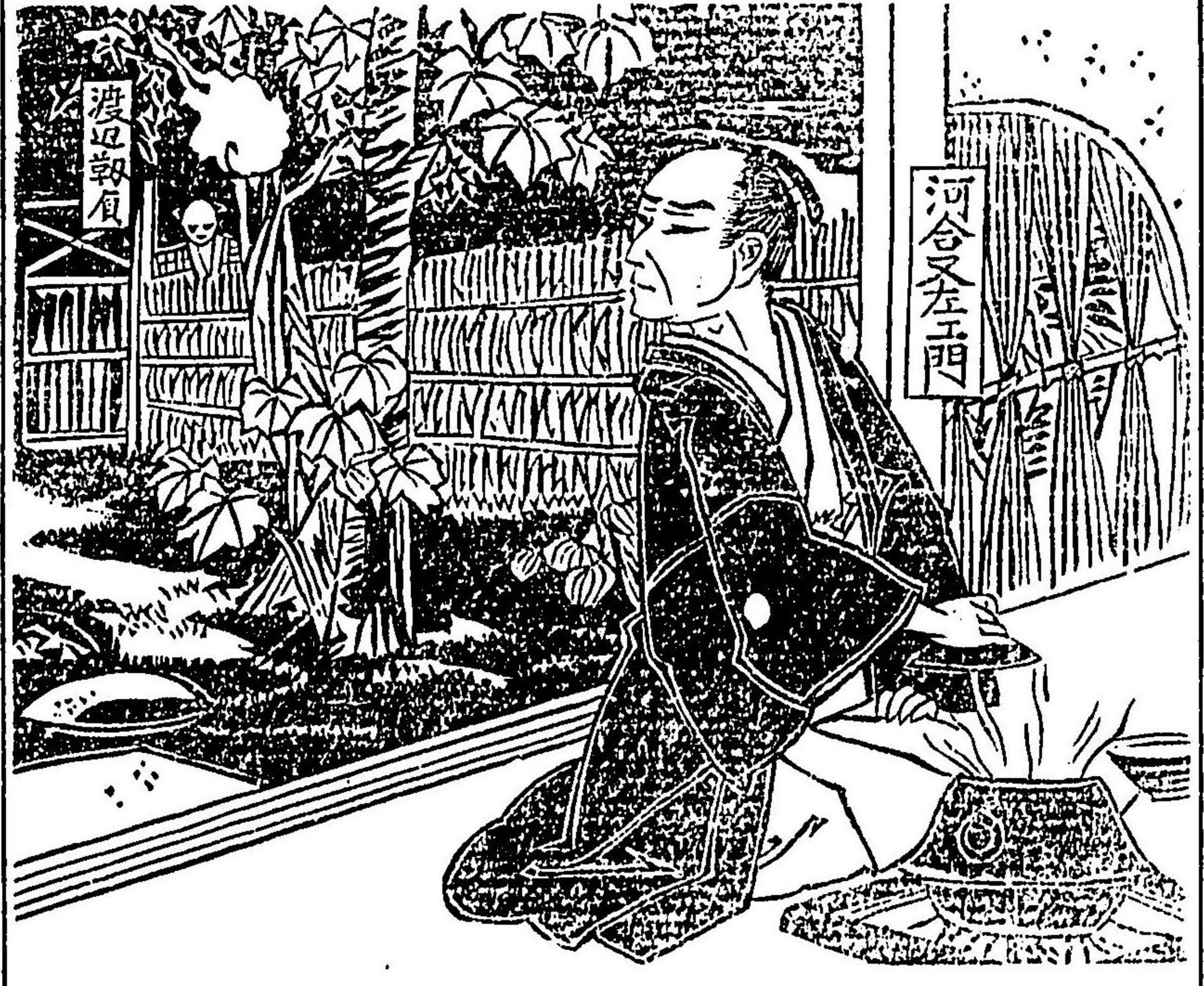
繪入 伊賀越荒渡美談 實錄

○第一回

東京 隱見亭 霞船編

寛永年間徳川三代の將軍家光公の御治世に當り備前岡山の城主松平宮内大輔忠雄と稱するの聰敏の聞へ高く(後因州鳥取に移る)其臣渡邊鞆負と云の同家中の河合又左衛門とい別段の入懇なりしが河合の家祖先より傳來する正宗の名刀あり鞆負の頼りに懇望すると雖も又左衛門の先祖より傳ゆる名刀なれば我等が手より進上する事の相成難し併し貴殿の懇望黙止難ければ今宵忍びて持行るべし然る時に拙者の手元より進せし者にあらざれば祖先に對しても相濟のみか我等も承知の上なれば貴殿に於ても又賊の所業に非ずと堅く契約して別れける其夕暮又左衛門の庭に立出鐵を取て花壇の土を掘返せしに二尺余りの蛇が蟠り居たるを知らず過つて蛇の首を斬落せしが首の忽ち飛上りて行勝知れず相成ける又左衛門の益なき殺生を爲てけりと吻き乍ら早黄昏よ及びしかバ夕飯をすませ正宗の一刀を座

敷に飾り稍深更に及び次の室にて茶を立んと罐子の蓋を取て湯を汲んとしけるが何思ひけん其座を立上りぬ此時鞆負の豫ての約束なれば庭口へ忍び來り内の様子を伺ひ居しに花壇の中より一團の光り物相發し座敷の方へ飛行罐子の内に入よと見る間に又左衛門の茶入を持って出來り湯を茶碗に汲取しかば堪り兼て鞆負の聲を掛其湯に付てすすべき事ありと云乍ら内に入り奇怪の事共を語り罐子の中を改め見るに蛇の首あり汲取し湯の油切て泡立居たるに驚きありし次第を又鞆負に物語れば是全く名刀の威徳ある



繪入 伊賀越荒渡美談

を以て貴殿の身に及ぼす事能はず斯る寶刀を望みしに拙者の誤り決して向後の斷念仕るべしと已に歸宅をなさんと爲るに又左衛門の押止め一旦武士が約せし上の變替する事の成難しと言けれ共鞆負も固辭して隨はず然る何時でも入用の節に進ずべしと証書を認めて鞆負に渡し其夜の互ひに別れけるが光陰に關守あく何時か十年の春秋を過しに又左衛門の重病を受針灸藥治の効驗なく最早臨終の際に至り渡邊鞆負に遺言して子息又五郎の事を頼み正宗の名刀を譲らんと云けるを鞆負の受ず我等入用の節の受べし御子息又五郎殿の儀の如何も承知致せり迎立歸りぬ又左衛門の其後程なく泉下の客と相成ける一子又五郎の父の遺跡を受繼て近習役も召出されける茲に當時荒木又右衛門吉村と云ふ劍道名譽の達人あり伊賀國荒木村の郷士又兵衛の一子にして幼名を丑之助と云ふ幼き頃より武術を好み南都寶藏院の門人となり鎗術を學び尙ほ柳生十兵衛殿に隨ひて奥儀を極めり江戸へ下るの折柄東海道宮の渡し場にて福島浪人北藤武右衛門の危難を救ひし砌り渡邊鞆負と入懇に成打連立て江戸に下り鞆負の世話を以て麴町へ道場を出せしが其頃和州郡山の城主本多大内記正

勝と稱する方の武道を深く好まれしが荒木の高名を聞及べれ屋敷に召されて其術を試み給ふに噲も違ひぬ達人あるを以て五百石に召抱へられける是に依つて鞆負の自分の長女を贈りて又右衛門の妻となし彌親戚の因みを結びける却説河合又五郎の近習役を勤め居しが此程より遊里に立入り身持太だ悪かりせば借財も多く出来一家中の評判も日に増て不良より鞆負の又五郎を招き教訓を加へ負債を償ひ種々異見を致れ共改心する様子も無益々放蕩を盡すも方一正宗の刀をも他人へ渡しも致しなば又左衛門へ



約せし詞立難しと思ふ者から或日又五郎を招き貴殿の所持せらる正宗の名刀を暫時借受たしと請けるに又五郎の直に承知を致して歸りしが其後贖物を拵へて贈けるに鞆負の一見して其偽を知らずと雖も其儘にして打過置しに又五郎の竟に役儀を取上られ青山下屋敷の住居と相成ける然るに或日の事鞆負の他行の留守中なりしが同家中の若侍兩三人渡邊方へ來り數馬へ入けるの今日青山の下屋敷にて試し物ある由を云に數馬も悦び支度を整へて何心なく正宗を携へ下邸に到り其身も試して見しに思ひも寄らぬ鈍刀なる故并居る者の興を覺し河合家の寶刀正宗の切味如何にも美事なりと咄と計りに笑ひける又五郎も其席に在しが大ひに赤面し其儘宅へ歸り熟々思ひけるの彼の正宗を贖物と知りつゝ數馬に持せ我に恥辱を興へし憎き渡邊親子の者共此恨を返さんと斷をなして怒りける鞆負の斯る事と知らず宅へ歸りて様子を聞に子息數馬が正宗を持て試しに行たるの贖物と知らずに行たるなり万一事を惹起さば由々數大學と其儘馬に打乗飛が如く青山さとして急ぎける

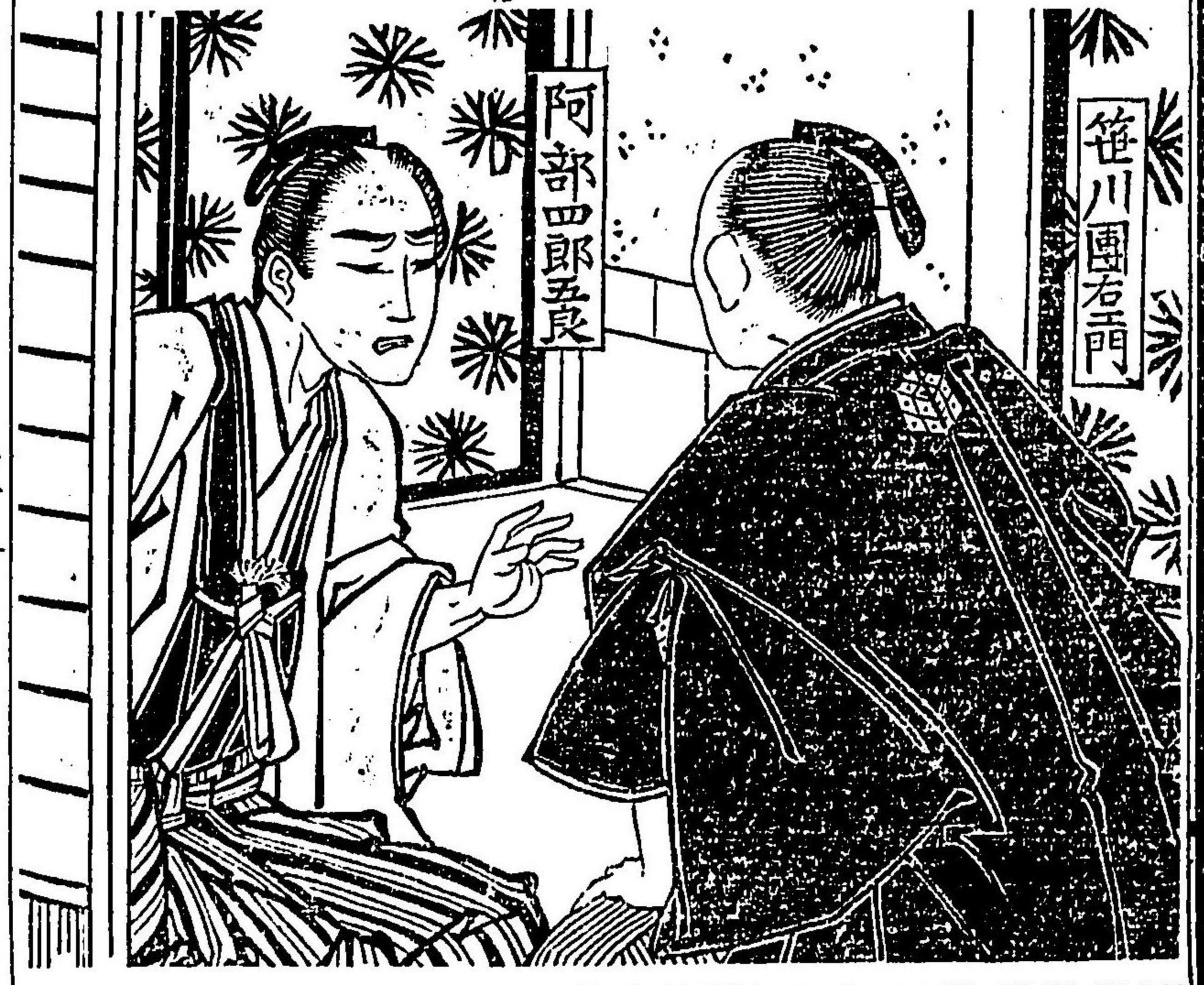
○第二回

斯て鞆負の青山の下邸に馳付しが最早皆々歸りし後にて何事も無き様子なりせば一個心を安んじ又五郎の宅へ立寄り案内を乞ひて立關より座敷へ通る折柄又五郎の鞆負の來るの正宗の談事に來る者ならんと思ひ結たる者から不意に現れ抜打に斬付たり鞆負の聊か異心あり共知らざれば油斷の處を深手を負然共一足飛下り刀を抜んと致せし間に又い肩先へ切込れ其儘控と倒るゝを又五郎の乗掛り咽を深く刺貫き刀の血を拭ひも敢ず堀を乗越へ其堀を立去り豫て懇意の御旗本番町の阿部四郎四郎の邸に到り面會



の上述るやう私し儀今日武士の意恨に依り同家中の渡邊鞆負とやす者を打果して立退すは
 何卒此上の處御願ひや上度と述ければ四郎五郎の大ひに悦び其仔細の兎も角も小身の某と
 を見掛られ御頼の口上を受るゝ於ては拙者の満息此上あらず御身分の處へ氣遣ひあるな如
 何にも承知仕ると輒く受合けるにぞ又五郎も殊に悦び何分にも宜敷願ひ奉るとやける此
 時四郎五郎の又五郎に向ひ今宵の同役の者も来るを以て對面あるべしと種々向後の事杯を
 物語り左右する内近藤登之助池田勘兵衛兼松又四郎大久保主膳其外二三名の旗本衆が來り
 しよ四郎五郎の又五郎を引合せ身分を引受し始終を告しよ何れも同意し尙も平常親く交る
 同氣の人々へ廻文を以て告知らせ多勢心を一致して又五郎を圍ひける却説河合の隣家にて
 の何やら只事ならぬ物音に驚き馳行見に鞆負の朱に染て横死を遂又五郎の透電致して居ら
 ず老母のみ在ければ取敢ず上屋敷へ注進致し檢視の上死骸の數馬へ下され又五郎の老母へ
 の嚴重に番人を附られ夫より又五郎の踪跡を御吟味あるに一向手掛りも無かりしが遂に三
 番町の阿部四郎五郎の屋敷と知れけるに予速に御使者を以て掛合るれど事を左右に云紛ら

して渡されず其後數度の掛合に及べれける
 が更に取合ぬ處より然バ又五郎の老母を刑
 すべし此段念の爲申入ると云送られしに又
 五郎を初め多くの旗本方も當惑致せし折柄
 池田勘兵衛の進み出拙者此儀を言ふべしと
 宮内大輔殿の本家の事ゆへ罷り趣し老母と
 又五郎と引替に致さんと申入けるに予然ら
 ば迎又五郎の母を乗物にのせ番頭役笹川團
 右衛門が附添て三番町の阿部四郎五郎方に
 到りし處迫ての親子今生の暇乞をさせ度い
 間暫時老母を借受たし其替りとして四郎五
 郎の一子を入質として差出す由を只管頼み



繪入 予は速に御使者を以て掛合るれど事を左右に云紛ら

けるにぞ團右衛門に於ても其意を察し人質を取て又五郎の母を渡せしに是全くの四郎五郎の
 一子も非ず皆謀計に陥せし者にして贈りし人質も贖物なり團右衛門大ひに驚き詞を盡し
 て掛合ける共更に老母を返さぬより進退茲に谷り去り迎おめく邸へも戻られず夫より誓
 提所に到り書を遣し割腹に及びて相果ける此事を宮内大輔殿の聞し召より益々憤り給ひ此
 上の人數を差向弓矢を以て受取んと其用意頻りなり又阿部四郎五郎の屋敷にても夫なる様
 子を聞と等く同意の者を呼集め防禦の手段を相設け押寄來らば打拂いんと鎗長刀の鞘を拂
 ひ今や遅しと待受たり其景勢を見るよりも市中の騒動大方ならず今にも合戦の起らんと逃
 迷ふ者も多かりける然るも松平宮内大輔殿に急病にて御死去相成しに家中の混雑大方な
 らず又五郎の一條も其儘に棄置れけるにぞ旗本の方にてても一旦集りし人數を解きて退散せ
 り然れ共何時不意を打れんも圖り難しと尙も用心を致しける

○第三回

却説渡邊數馬の父の横死に仰天し其歎き大方ならず屍の泣々も葬り此旨を姉婿なる荒木方

に報知しを以て又右衛門夫婦の驚き物に譬
 へん様もなく去り迎仕官の身なるが故に江
 戸表に出府する事も成ず余儀なく門人北藤
 武右衛門に意中を中合め江戸表へ下しける
 然るに其頃大雨降續き諸々の川支にて道中
 殊の外延引致し漸く江戸に到着せし頃宮
 内大補殿御死去にて嗣君相摸守殿が御相續
 相成又阿部四郎五郎を初め其他の旗本方も
 公邊に聞へ不埒の所業なり迎塾居を申付ら
 れ事鎮りし後あるが武右衛門の數馬の宅へ
 着し又右衛門の口上を逃けるにぞ數馬の大
 ひに力を得て即日仇討御願ひの書面を差



又右衛門

出せしに御前へ召れ其方若年の身として仇討願ひの儀神妙なり然共又五郎の助力の者多くある由汝ち一人にて討ん事甚だ心元なしと仰けるに數馬の謹んで答に及びけるやう私し姉婿荒木又右衛門と云ふ者助太刀致し吳の趣きを言上せしに殿にも御安堵あり然る上の氣遣ひさし速かに本望を達し再度目出度立歸るべしと白銀五十枚に不動國行の刀を賜りけるにぞ數馬の有難く頂戴致し御前を退き其由を母にも物語り早速旅装を整へて北藤山添と共に出立の折折母の門出の酒宴を開き愛度發足に及びし頃寛永九年九月上旬江戸を立出和州郡山の荒木方に着し又右衛門夫婦に對面し互ひに無事を賀し又數馬の涙ながらに父の横死を遂たるより主家の騒動に到りし次第を語り此度御暇を願ひ敵又五郎を一刀恨んと思ふ折河合に大勢の助力ある由若年の某し不覺の名を取ての君父の名を汚さんと殿にも深く御心痛遊ばされしに貴兄御助太刀下さる旨態々仰越され御厚情有難く存じ奉ると述べられ又右衛門も其志しを感じ數馬を我方へ留め武術の手練を勵ませけるが數馬も父の仇を討んと云ふ精神なれば忽ち武術の上達せしに最早出立を爲んと願書を認め御暇を願ひ出し

に主君大内記殿にも又右衛門の義心を御感あり且柳生流の極意眞劔白刃取の術を御傳授を中上首尾能御暇を賜りければ又右衛門の妻女を江戸表へ遣し姑の介抱を致させ夫より支度も整ひければ郡山を出立致し先大坂へと志しける然に櫻井甚左衛門と云ふ者の鎗術の指南番にて又五郎の爲に伯父なれば定めて河合に助力なさんと思ひし者から北藤山添を跡に残し其様子を伺ひせけるに果して殿へ御暇を願ひ是も大坂へ出たりと聞き荒木の櫻井の旅宿より日毎に入込ける故に甚左衛門も困じ果弟甚介と謀



繪入 伊賀越後度 美談

り此ほど御旗本より使ひに来る竹内玄丹と云る劍客を語ひ荒木を聞殺せんと致せしなれど却て荒木の爲に打懲され方々の体にて江戸表へ送歸りける櫻井兄弟も術計殆ど盡けるが漸く又右衛門を出抜て大坂を夜に紛れて東海道を下りけるに又々赤坂の驛にて荒木に出合今い詮方なく同道して江戸表へ着し新橋にて立別れける斯て又右衛門の又五郎の舉動を伺いんと日々阿部四郎五郎の屋敷の邊を徘徊す又五郎の之より獲旗本中の助けを得て三州大濱に隠れ居たるが尙ほ肥前相良へ落し遣る途中見送りとして櫻井甚左衛門同甚介竹内玄丹高木清兵衛宇佐美五右衛門星合團四郎八十島嘉兵衛長谷部九兵衛川角源六松波金四郎田村半平高坂庄五郎金子佐四郎岩井金平關口政太郎風間重右衛門是等の人々の何れも一流の奥儀を極めたる面々なり案内者として吳服屋重兵衛以上三十六人密に江戸を立て三州大濱をる又五郎の隠れ家に入り阿部四郎五郎を初め其他の御旗本よりの厚意を傳へけるに又五郎の悦び大方ならず夫より打連立て同地を發足致し東海道を上り伏見に數日逗留せり

○第四回

却説荒木又右衛門の渡邊數馬北藤山添と諸共に櫻井甚左衛門等の後を慕ひ東海道を上りしが三州吉田にて彼の黨を見失ひしに荒木の思慮を施らし伏見に來りて又五郎の踪跡を探り漸く旅宿を索當向も様子を伺ふに翌日の伊賀越をさして出立の趣きを聞出しけるに又右衛門の大ひに悦び伊賀の上野の屈竟の地なり此處にて本望を遂んと同所へ駈板小田町の万屋と云ふに宿を取握原源右衛門に付て仇討の由を届出けるが早速殿へ言上し御開濟の上町奉行へ御下知相成夫より嚴重に固めを命ぜられしに又右衛門に



於て藤堂家の厚意を深く謝し旅宿へ返り敷馬へも其趣きを云聞しに敷馬を初め北藤山添も打悦び其翌日の未明より旅宿を立山上野に來り河合又五郎を待受たり此時寛永十一年十一月六日なり然るに又五郎の一行の斯ども知らず旅装を飾り眞先に櫻井甚左衛門次弟其助にて乗掛に半弓を携へたり三番に河合又五郎夫より竹内玄丹星合團四郎八十嶋嘉兵衛松波金四郎田村半平高坂庄五郎と列を正ふして伊賀の城下へ乗込來り今小田町の四ツ辻を左りへ曲らんとせし折柄待設けたる四人の者の一度に其場へ現れ出中にも敷馬の眞先に進み出大音上て云るやう如何に又五郎汝ちが爲に討れたる鞍負の子息渡邊敷馬此處に待つ事稍久し率尋常に勝負をせよと身構へあして立塞りぬ荒木も夫へ現れて名乗掛れば思ひも寄らぬに打驚き咸々臆して見へにける此時櫻井甚左衛門の馬上に於て諸人を勵し敵の僅かに四人なり何條恐るゝ事のあらんや押取込て討取給へと馬より下んと致すを又右衛門の透さず飛込左りの足を切落しぬ然共強氣の甚左衛門の刀を抜より斬て掛るを荒木の横に拂ひたる鋭き太刀先受損じ首をば其處に打落されける斯と見るより弟の甚介の兄の敵遣さ

じと半弓に矢を番切て放すを又右衛門の身を沈まして受流し又候射出す其隙に飛込ちがら切倒しぬ北藤武右衛門山添伊兵衛の兩人も今日を限りと死を決し勇を振ふて戦ふたり然共敵手の三十餘人の多勢なる故押取圍んで無二無三に切立難立切結ぶ中にも又右衛門の其當代に二と下らぬ頗る武術の達人なれば恰も二王の荒たる如く數人を討受戦ふ狀の眼にさへ留らぬ計りにて忽ち五人を切て捨たり竹内玄丹の前に又右衛門の爲に打懲されし事もありて其身の恨みもある者から荒木を是非とも打取んと鎗を取延後



荒木

より近附寄て突出すを心得たりと又右衛門の飛鳥の如くに立働き川角源六長谷部九兵衛を斬倒し尙も勢ひ百倍して當るに任せる奮激突戦さしもの多勢も切立られ四方に崩れて乱るを得たりや應と踏込く又候數人を斬伏ける

○第五回

諸も竹内玄丹の多勢を頼みに荒木を討んと鎗を持って立向ひしが又右衛門の斯と見るより己れに先にも手向ひせし奸賊思ひ知るべしと大喝一聲諸共に斬付たりし刃の電光受損じたる玄丹の唐竹割に切倒され血煙り立て死してける星合團四郎の長刀を打振荒木を討んと立向一上一下虚々實々火花を散して戦ひしが荒木の爲に討れけり然共又右衛門の數馬に又五郎を討せんと思へば縦横無盡に相手を擇まず切立く千變萬化の秘術を盡し益々勇を震ひつゝ戦ふ中にも氣遣ひなるの數馬の様子も知されと去り迎其場も退ずかれぬバ彌々奮勇を相現し金子佐四郎宇佐見五右衛門等を切倒し其働きの凄じく然れど河合に助力の輩も死をバ決して無二無三に前後左右と取圍むを宛然草を薙が如く或の胴切腰車手足を別たず切捨る

山添伊兵衛北藤武右衛門二人に於ても諸々に手傷を受ながらも流石の荒木の高弟なれば是又數人を引受て秘術を盡して戦ひける却説渡邊數馬に於ては余人の者への眼も掛ず怨敵又五郎を討取んと君より恩賜の名刀を閃かし撃て掛るに心得たりと河合の馬より飛下り鎗を取延立向ひ敵呼はり小癩の一言覺悟に及べと言ながら互ひに進み退きつ上中下段と火花を散して戦ふたり然るに數馬の小田町の坂下さして馳出し金蓮寺の門内に駈入しに又五郎の逃ると心得己れ此場て遁るゝ共逃しはせずと大ひに焦立鎗を引



繪入 丹波 武右衛門 河合又五郎

提追掛來れり數馬の地の利を見濟して取て返して戰ふたり荒木の多勢を切倒し吐息吐問も非ず數馬の如何なしたるかど章駄天走りに駈來り見れば未だに勝負も付ず然共數馬の小鬘の邊に聊か薄手を負たれど又五郎の手傷も無く益々勇を震ふに又右衛門の大音を上數馬少しも恐るゝな最早河合の一味の者此又右衛門が討留たるぞ汝ち此場に討るゝ共荒木が又五郎を討取遣す心を憐み勝負をせよと聲掛られて忽ちに其勢ひの十倍も一歩も退ず戰ふたり又五郎の己れが黨與の人々が討取れしと聞よりも以前の勢ひ忽ち挫け鎗先亂るゝ其處を數馬の得たりと踏込ゝ竟に突出す鎗先を千段巻より切て落し刀を抜んと致すをバ飛込様に切倒し止めの刀を刺したりける又右衛門の數馬を賞し藤堂家より出張せられし人々も首尾能仇討に及びしを賀し皆藩邸へ伴はれて手厚く饗應され其後數馬の目出度本藩に歸參し荒木も又舊主に仕へ何れも後世美名を残しける

繪入 實録 伊賀越荒渡美談終

御届明治十八年一月廿三日

定價四錢

編輯人

岡田良策

東京府平民

淺草區西三筋町三十四番地

出板人

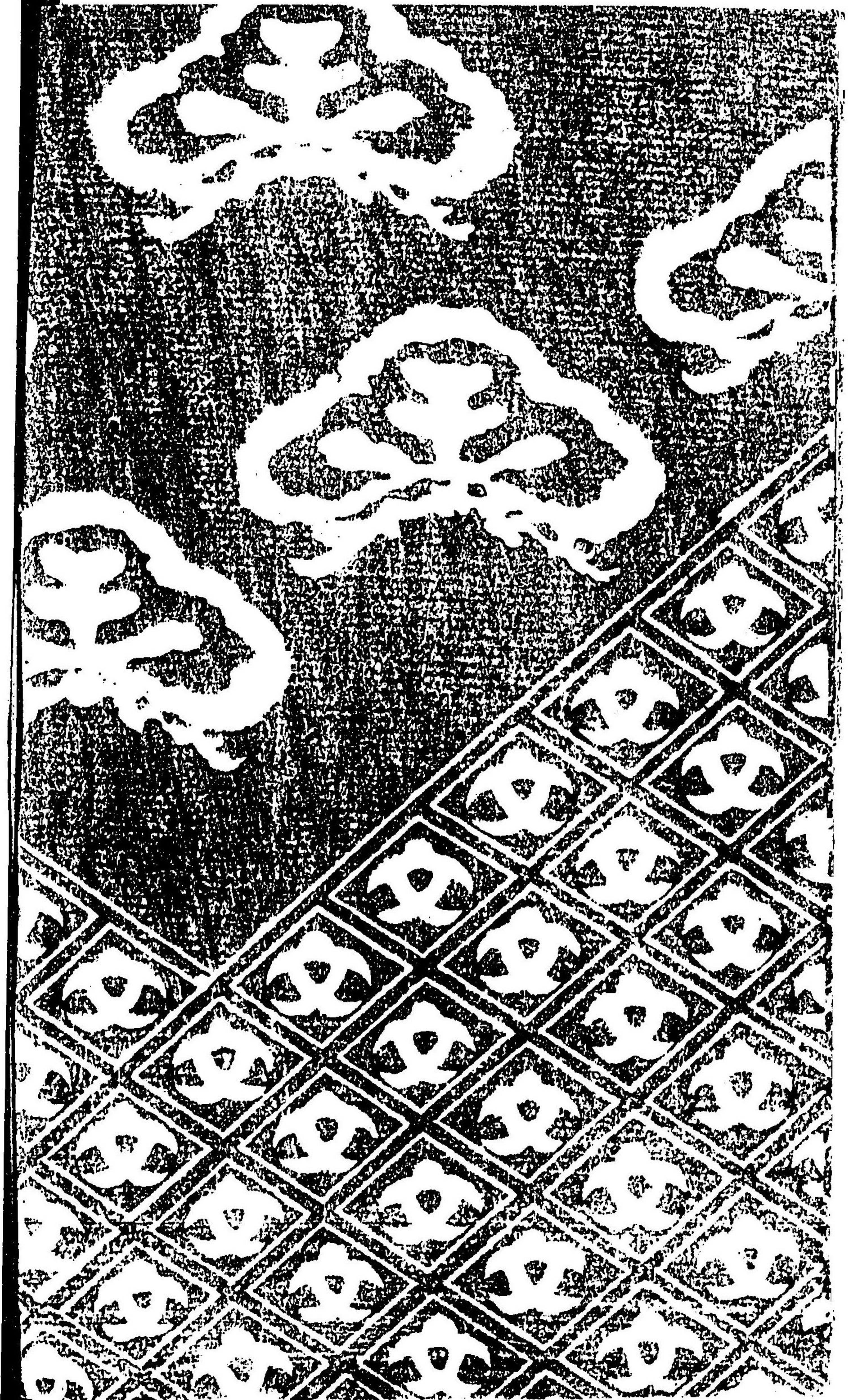
辻岡文助

東京府平民

日本橋區横山町三丁目貳番地

- 一 繪入 實録 官本二刀傳全 一冊
- 一同 天一坊物語全
- 一同 越後傳吉孝義錄全
- 一同 鏡山女庭訓全
- 一同 伊賀越荒渡美談全
- 一同 新編曾我物語全

- 一同 佐倉義民強訴傳全
- 一同 白子屋於熊命月輪全
- 一同 赤穂精義名士傳全
- 一同 小栗照手優美傳全
- 一同 伊達黑白公判錄全



特42

914

繪入
寶錄

伊賀越荒渡美談
全



205018-000-5

特42-914

伊賀越荒渡美談

隱見亭 霞船/編

M18

EDV-0010

